

瑜伽師地論本地分に見られる アーラヤ識縁起説の萌芽

小谷 信千代

唯識派では現象世界の成立過程は一切種子識・異熟識・アーラヤ識等と呼ばれる根本的な識から顕現した現象として説明され、過去の業と現在の生の関係は識の支分を中心として生成流転する過程を説明する唯識的な十二支縁起説によつて説明される。そしてこれら二種の説明はアーラヤ識思想の発達に伴ない次第に統一され、やがて識転変説が成立することによつてアーラヤ識を共通の基盤とする縁起説へと整備される。しかし初期唯識論書には縁起説はそのように統一的に説かれはしなかつた。それら二種の説明がどのように統一的に説明づけられるに至るかを跡づけることは唯識思想史を解明する一つの手懸りとなるであろう。今は唯識論書中最古層に属するものの一つと考えられる瑜伽師地論本地分を考察する。

その本地分に於てはそれら二種の説明は縁起説としてまとめて説かれ、しかもその縁起説はほぼアーラヤ識によつて統一され始めていることが以下の如く推察される。以下縁起説が関説されている五識身相応地・意地・有尋有伺地・無尋唯伺地・無尋無伺地の五地中に見られる縁起説を考察してみよう。

そこには八種の縁起説が説かれている。①内識生門、②外縁成熟門、③有情世間死生門、④器世間成壞門、⑤食任持門、⑥自作作業

増上勢力受用隨業所得愛非愛果門、⑦威勢門、⑧清淨門。以上八種を安慧釈大乘阿毘達磨雜集論の説明に従つて理解すれば、十二支縁起説によつて表わされるものは①③⑥であり、そしてそれら三の中間①⑥は十二支中の一部の支を説く縁起説として説かれており、③は全ての支分を説く縁起説として説かれていると言われている。つまり①⑥は現象世界の生起の因果関係を十二支縁起説の或る一部分に焦点を合わせる様にして説かれた縁起説であり、③は輪廻に於て生成流転する過程を十二支全体によつて説明する為に説かれた縁起説である。ところでここで注意を引くことは、五識身相応地から無尋無伺地に至る構造がこの縁起説の分類に全く一致することである。即ち①⑥の縁起説は五識身相応地と意地に於て、③の縁起説はその他の三地に於て説かれている。その場合アーラヤ識がそれぞれどの様に説かれているかを見てみると、五識身相応地では五識の所依として「一切の種子を有し身体を維持し異熟という性質のアーラヤ識」が説かれ、意地では来生に生を結ぶ時に「一切の種子を有し異熟の性質があるアーラヤ識が身体を獲得せんが為に」精血中に凝固する、と説かれている。それ故そこで説かれる十二支縁起説がただ一部の支分のみを説くものであるにしても、ともかくも十二支縁起説はここではアーラヤ識と関係して説かれている。他方有尋有伺乃至無尋無伺の三地に於ては、隨業識・後有相續識・異熟識等の明らかにアーラヤ識を意味すると思われる名称を用いつつ実際には「アーラヤ識」という名称は全く用いられていない。が、しかしここでも十二支縁起説はそれらアーラヤ識を予想せしめる諸識と関係して説かれている。更に①⑥の縁起説の説かれている所では有情世間と器世間の現象過程が説明せられ、③の所では煩惱・業・生の流転輪

廻の次第が説明せられている。従つて現象世界の成立を説明する縁起説と流転輪廻を説明する十二支縁起説の二は未だ表立つてはアーラヤ識によつて統一されていないが、アーラヤ識を予想させる概念が使用されていることから、ここに所謂アーラヤ識縁起思想の萌芽を認めることができると考えられる。以下に現象世界の成立と流転輪廻を説く十二支縁起説が如何に説かれているのを考察してみよう。

a、現象世界の成立に関して

五識身相応地意地に於てアーラヤ識は六識にとつて種子依であるとされる。そこでこの全ての種子を有する根拠としてのアーラヤ識と現象世界の關係を考えてみたい。現象世界は有情世間であれ器世間であれ全てそこに生存するものの業の所産であるとする有部・經部の考えを瑜伽師地論は更に展開し、全ての存在は皆それ自身の種子から生ずるとされる。例えば色聚に於てそこに於ける全てはそれ自身の種子から生じているに拘らず一般には大種から生じていると考えられることに關して次の様に言う。即ち大種も所造色も共にその種子はアーラヤ識中に含まれているが、所造色がアーラヤ識中のそれ自らの種子から生ずるには必ずそれに先立つて大種が生じていなければならない。それ故、所造色は大種から生ずると誤解されがちであるが、実は所造色はそれ自身の種子から生ずるのである。従つて全てはアーラヤ識中のそれ自身の種子から生ずる。

b、十二支縁起説に關して

③の縁起説を説く有尋有伺乃至無尋無伺の三地に於て説かれる隨業識等の一連の識とアーラヤ識の關係を考察したい。ここでは縁起の骨格が要約して①過去から現在に生ずること。②現在から未來に

生ずること。③現在に生じたものが更に生成流転する場合と清淨へと向う場合とがあること、として説かれている。これによつて十二支縁起説が過去↓現在↓未來へと煩惱の汚れを重ねて流転してゆく一面と、清淨へと向うことによつて流転輪廻を消滅させてゆく一面のみを考察する。過去の業によつて現在に流転する場合、過去の生と現在の生を結びつける役目を行うものとして隨業識・後有相続識・異熟識という一連の識が説かれている。これらの識は皆十二支中の第三識支分として説かれている。隨業識とは過去世に積集した業に従う即ちその業を縁とする識であり、過去世に於ける命終まで続く。そしてこの識を因として次の生に結びつく識（後有相続識）が母胎中に生ずる。その時、隨業識の縁となつた業はその異熟果を与えたことになるからその後有相続識は異熟識とも呼ばれる。そしてこの異熟識は名色に依つて生成流転する。また現在より未來に生ずる場合も同様に説明される。その場合興味深いことは、過去から現在の生への生起を説く場合には過去に積集した業に従うが故に識は隨業識と呼ばれるのに対して、現在から未來の生への生起を説く場合には現在の生に於て新たな業を作るが故に隨業識と呼ばれるというものである。前者からは過去の業の種子を備えたアーラヤ識を、後者からはアーラヤ識中の種子が全ての存在の根拠であることを、従つて所謂アーラヤ識の因転変と果転変とを我々に予想せしめる。ここに説かれる異熟識は現象世界の成立を説明する縁起説に於て精血中に凝結するアーラヤ識と同一である。従つてこの十二支縁起説に於ける隨業識等の識として表わされる識の支分もアーラヤ識を意味すると考えられるがアーラヤ識の名称は表面には現われない。